スキャンダルとファン心理[1)]

小　城　英　子
蓊　　理津子
小　野　　茜[2)]

Scandals and Fan Psychology

The purpose of this study is to analyze scandals and fan psychology with cognitive dissonance theory. 254 participants were requested to answer the questionnaire. In the questionnaire, four scenes (sex, drug, assault, and tax evasion) were chosen as the scandal scenes, and only one scene was presented to participants. It has been clarified that the drug scandal was not tolerated though the sex scandal was condoned. The fans with "Evaluation of the work" "Pseudolove", and "Repulsion to the fashion" tend to tolerate the scandal, but those who became fans quickly often lose interest after the scandal.

序

2009年8月，有名俳優が麻薬取締法違反の容疑で逮捕されたのに続いて，清純派のイメージで売っていた有名女優が夫とともに覚せい剤取締法違反容疑で逮捕され，社会を震撼させた．多くの一般大衆にとって，スキャンダルは，権威の失墜や転落をひそかに楽しみ，正義の名の下に攻撃を正当化するというカタルシス効果をもたらすため（海野，2000；中野，1987），有名人のスキャンダルは，センセーショナルに報道され，よりネガティブ性を強調される傾向がある．

しかし，一方で，その有名人を応援していたファンは，強烈な認知的不協和に陥ることになる．熱心なファンほど認知的不協和は強く，その解消は容易でない．ファン心理の研究分野では，好意を抱き，ファンになる心理については多くの研究がなされているが，本研究ではファン心理のネガティブな側面に着目し，スキャンダルとファン心理について実証的研究を行った．

問　題

スキャンダルとは何か

スキャンダルの定義

広辞苑によれば，スキャンダルとは「不名誉な噂．醜聞．みにくい事件」と説明されている．芸能レポーターの梨元（2001）は，スキャンダルがニュースと異なる点に，モラルやイメージから「転ぶ」という要素を挙げ，「隠されていた醜聞が明るみに出る」こととしている．佐藤（1987）も，スキャンダルを「原則的に個人の公序良俗に反する行為・行動」と定

義している．すなわち，スキャンダルとは，「モラルや規範，秩序といった一定の枠組みから逸脱したネガティブな行為や行動」といえる．

一方，類似した概念のゴシップは，広辞苑では「うわさ話．無駄話．閑談」となっている．うわさ研究の分野では，ゴシップとは，ある人の資質や行動についてのその場の意見であり，多くは人から聞いたことに基づく（Fine & Rosnow, 1978）と定義されており，一部にはポジティブな内容の場合もあるものの，大半は悪意を動機としたネガティブな内容である（川上，1997）．厳密に区別すれば，スキャンダルが「モラルから逸脱した行為（＝事件そのもの）」であるのに対して，ゴシップは「主にスキャンダルに基づいたうわさ話（＝事件に関するうわさ話）」ということになろう．

しかし，真偽のほどが定かでないゴシップも，ときとしてスキャンダルと同様の威力を発揮する（佐藤，1987）ことから，両者が混同されやすく，同義語として扱われていることも多い．また，スキャンダルに関心のある受け手は，ゴシップにも関心があると考えられることから，両者を明確に区別して論じることは困難である．本研究で用いる「スキャンダル」という用語は，ゴシップの意味合いも含んだ包括的な概念として定義する．

スキャンダルの対象

もともと，ゴシップは身近な人間関係の中で語られるものであり，対象となる人物がその場に不在であること，語り手・受け手全員が対象を知っていること，ゴシップの内容を対象に伝えるような人は参加していないことなどの特徴があった（川上，1997）．芸能人やスポーツ選手など，マス・メディアの発達によって作り出された「有名人」は，不特定多数の受け手に広く共有されている上に，前述のすべての条件を完全に満たしており，ゴシップの格好の対象である．対象は受け手に共有されつつも遠く離れた存在で，当人を直接傷つけたり，当人に伝わったりする危惧はないため，自由な誹謗・中傷が許されている．

その結果，有名人は，私的生活のあらゆる領域，身体の加工にとどまらず，持ち物やファッションはもちろんのこと，家を建てること，トラブルに巻き込まれること，恋愛，結婚や離婚，出産や子どもの運動会シーンに至るまで，ありとあらゆる私生活が情報商品として流通することとなった（石井，1998）．この場合の有名人とは，芸能人のみならず，マス・メディアによって有名性を付与された犯罪者や被害者なども含む（石田，2001；山川・山田，1987）．例えば，無名の一般人であっても，異常犯罪や，ドラマティックな事件に関わったために，連日メディアで取り上げられ，一躍有名となるケースなどが該当する．

政治スキャンダル，企業スキャンダルのように，組織や団体が引き起こす不祥事もスキャンダルの範疇ではあるが，対象が個人である方が，より明確に責任帰属が行われる．マス・メディアには，事件を集団・社会のものとしては扱わず，個人へと帰属する「パーソナライゼーション」の特徴があるが（Ranny, 1983），たとえ組織ぐるみのスキャンダルであったとしても，直接の関係者や，謝罪会見を行う幹部などを「悪役」に仕立て上げ，アクターとして演出する方が，受け手にとってはわかりやすく，事件に感情移入しやすい．したがって，スキャンダルは，実質は組織・団体の産物であっても，常に個人のものとして設定される傾向がある．

スキャンダルの内容

大井（1993）によれば，スキャンダルの内容は，具体的には，「犯罪・暴力的要素」，「金銭的要素」，「性的要素」の3つの要素が挙げられる．これらの要素の含まれるニュースは人々が興味を持ちやすく，視聴率も高い．また，この3つは，あらゆる属性や職業，社会的地位を超えて人間生活に共通する関心事である．

さらに，いずれの要素も，ネガティブ性がある．肯定的要素は面白味に欠けるのに対して，否定的要素は情報的価値を高め，受け手の関心を引きやすい（Kapferer, 1988）．各要素について見てみると，「犯罪・暴力的要

素」は，それ自体がすでに平和や正義から逸脱した，ネガティブな内容であり，非日常である．「金銭的要素」は，例えば有名人が背負った借金や，政治家の収賄などが該当する．「性的要素」は，生殖本能による自然な関心ではあるものの，一般生活においては性的関心をオープンにすることはタブーとして抑圧されている．また，表向きには，婚姻関係にある男女以外の性的行動は逸脱と見なされるスタンダードが存在する[3)]．

これらの要素は，スキャンダル報道に如実に表れている．例えば，保険金目的で妻を殺害したとの容疑で夫が逮捕されたロス疑惑（1981年〜），夫が妻子を殺害した筑波・母子殺人事件（1994年），一流企業の女性社員が殺害された「東電社員殺害事件」（1997年）などは，スポーツ新聞や週刊誌を中心に，関わった金銭の額が取り沙汰されたり，容疑者・被害者が私生活の性的部分を暴露されたり，ヌード写真を掲載されたりするなど，事件の本質から外れた要素が過剰に強調されている（小川，1997；杉尾，1997；飯室，1991）．

「犯罪・暴力的要素」，「金銭的要素」，「性的要素」は，いずれもネガティブ性という共通項はあるものの，厳密には性質が異なっている．たとえば，「犯罪・暴力的要素」を含む暴行や収賄，薬物使用などは刑事事件であるが，「性的要素」を含む不倫は民事事件であり，法的にも区別されている．また，同じ「犯罪・暴力的要素」の中でも，収賄や詐欺などは「金銭的要素」も含み，物品・金銭を返還すれば表面的にスキャンダル前の状態に戻すことは可能であるが，暴行は身体に直接的なダメージを与える犯罪である．一方，同じく「犯罪・暴力的要素」の中でも，薬物使用は自身の身体や精神を蝕むが，他者に直接的な被害をもたらすものではない．これらのことから，スキャンダルの中でも，「犯罪・暴力的要素」，「金銭的要素」，「性的要素」を区別して扱う必要があると考えられる．

スキャンダルとファン心理

ファン心理研究

社会心理学の分野では，1980年代からファン心理に関する研究が発表されており，「阪神タイガースのファン気質に関する研究（1)」（広沢・田中，1986)・「阪神フィーバー現象の分析」（広沢，1989)，「ユーミン現象」（中村，1994)，「小田和正ファンの心理」（上野・渡辺，1994)，「タカラヅカファン」（上瀬，1994)，「大相撲ブーム」（上瀬・亀山，1994）などがある．いずれも個別の対象に限定された事例研究であり，一般的なファン心理の解明には至っていない．

これを受けて，小城（2004）では，ファン対象を「直接のコミュニケーションを持たず，マス・メディアを介して知り得るタレント・アーティスト」と定義して，事例研究を包括する形でファン心理全般の構造を解明している．その結果，ファン心理は「作品の評価」，「擬似恋愛感情」，「外見的魅力」，「同一視・類似性」，「流行への同調」，「ファン・コミュニケーション」，「尊敬・憧れ」，「流行への反発・独占」の8因子に分類されること，その中でも，特に「作品の評価」，「尊敬・憧れ」がファン心理の主軸であること，対象の職業がアイドルや俳優の場合には相対的に「疑似恋愛感情」や「外見的魅力」が高いことなどを見出している．

その後，思春期・青年期の発達課題の視点からファン心理を分析した川上（2005）や，音楽ファンの精神健康を扱った西川・上笹（2006）など，ファン心理研究はいくつか発表されているが，いずれも好意を抱く側面が中心であり，ネガティブな感情や行動については扱われていない．

スキャンダルがファンにもたらす認知的不協和

冒頭で紹介した有名俳優・女優の薬物事件のように，有名人のスキャンダルは，ファンに強烈な認知的不協和を引き起こす．このとき，ファンはどのように不協和を解消するのであろうか．

認知的不協和理論を提唱したFestinger（1957）によれば，人は不協和

を増大するような情報や状況を避けようとするが，不協和に陥った場合は，その解消法として，ネガティブな要素を過小評価する，ポジティブな要素を過大評価する，別の要素を持ち込んで評価基準を変える，などが挙げられる．スキャンダルとファン心理でいえば，スキャンダル自体を否定したり，スキャンダルのネガティブ性を過小評価したり，あるいは，これまでの功績や名声を再評価したり，他の有名人のスキャンダルと比較したり，スキャンダル自体を一般化するなどである．

ファン心理との関連

上記のスキャンダルによる認知的不協和の解消パターンは，もともと抱いていたファン心理によって異なることが考えられる．

前述のように，ファン心理は「作品の評価」，「擬似恋愛感情」，「外見的魅力」，「同一視・類似性」，「流行への同調」，「ファン・コミュニケーション」，「尊敬・憧れ」，「流行への反発・独占」の8因子から構成されている（小城，2004）が，たとえば，「外見的魅力」や「流行への同調」の高いファンは，関与が表面的であることからスキャンダルによる認知的不協和が弱く，ファンをやめる（既存の態度を変容する）ことで比較的容易に不協和を解消できるであろう．「作品の評価」の高いファンも，仕事の結果としての作品を本人から切り離すことで既存の態度を維持でき，不協和解消は可能である．また，緊張や不安は親和欲求を高めることから（Schachter, 1959），「ファン・コミュニケーション」が高いファンは，ファン同士の交流を活性化させ，互いに不協和を共有することによってストレスの軽減を図ると推測される．

しかし，「疑似恋愛感情」，「同一視・類似性」，「尊敬・憧れ」など，本人自身への関与の強いファンは，強烈な不協和に陥り，その不協和解消は容易ではないと考えられる．一方，「流行への反発・独占」の強いファンは，同じく本人自身への関与を示す側面でありながら，大衆に消費されることを嫌い，独占したい心理であることから，逆にスキャンダルによる人

気低下を喜び，満足を得る可能性もある．

本研究の目的

有名人のスキャンダルは，ワイドショーや週刊誌を中心として，マス・メディアの格好のネタであるが，その内容には，「犯罪・暴力的要素」，「金銭的要素」，「性的要素」があり，それぞれ性質が異なる．一方，ファンの抱く心理によって，スキャンダルに直面したときの心理も異なると推測される．本研究では，スキャンダルのタイプと，ファン心理の違いに着目し，スキャンダルの内容を操作した場面想定法を用いて，スキャンダルに直面したときのファンの心理を分析する．

方　法

調査対象者：東京都S女子大学，T大学，K大学，W大学に所属する大学生及び社会人254名（男性76名，女性178名）が調査に参加した．平均年齢は23.4歳（SD=8.1）であった．

調査時期：2008年8月から9月に実施された．

調査方法：個別配布個別回収

調査内容：「お気に入りの芸能人」を1人もしくは1グループ挙げて具体名を記述してもらい，職業，性別を尋ねた．芸能人の職業は，ミュージシャン94名（37.0%），役者・俳優93名（36.6%），アイドル29名（11.4%），スポーツ選手20名（7.9%），その他18名（7.1%）であった．次に，「お気に入りの芸能人」に対する尺度として，小城（2004）を参考に独自に作成したファン心理尺度36項目，予備調査を経て選定したファン行動尺度15項目（いずれも5件法）に回答を求めた後，「ワイドショーで『Aが不倫をした！』と報道されました．Aの事務所やA自身がスキャンダル内容を認めているかはまだ不明です．」と具体的な場面を提示した．スキャンダル場面は，「不倫」，「麻薬」，「暴行」，「脱税」の4バージョンを被験

者間要因として設定した．スキャンダル場面提示後，予備調査を経て選定したスキャンダル後の感情26項目と行動9項目（いずれも5件法）と，ファン行動15項目を尋ねた．ファン行動は，スキャンダル前後で同一の項目を用いた被験者内要因であった．フェイス項目は年齢，性別，職業であった．なお，質問紙には「お気に入りの芸能人」に対するイメージ尺度も含まれていたが，本稿では扱わない．

結果と考察

ファン心理・ファン行動・スキャンダル後の感情・行動の構造

ファン心理36項目について因子分析（主因子法，Promax回転）を行い，7因子構造と判断された（Table 1）．第1因子は「外見的魅力」（M=4.04, SD=1.01, α=.935），第2因子は「作品の評価」（M=3.91, SD=, 0.76 α=.858），第3因子は「流行への反発・独占」（M=2.16, SD=0.99, α=.780），第4因子は「尊敬・同一視」（M=2.87, SD=, 1.00 α=.822），第5因子は「疑似恋愛感情」（M=2.96, SD=0.81, α=.793），第6因子は「流行への同調」（M=3.09, SD=0.85, α=.726），第7因子は「嫌悪」（M=1.52, SD=, 0.65 α=.714）と命名された．小城（2004）と比較すると，「ファン・コミュニケーション」や「尊敬・憧れ」を示す項目が「作品の評価」に含まれていたり，「同一視」を示す項目が「尊敬・憧れ」に含まれていたり，新たに「嫌悪」が抽出されるなど，やや因子構造が異なっているが，その理由として，小城（2004）とは用いた項目が異なっていること，小城（2004）ではファン対象を「マス・メディアを介して知り得るタレント・アーティスト」として広義にスポーツ選手なども含んでいるが，本研究では「お気に入りの芸能人」としていること，本研究の調査対象者には社会人が含まれていることなどが考えられる．

ファン行動15項目は，スキャンダルの前後別に因子分析を行ったところ，ほぼ同じ構造であったものの，1〜2項目の負荷が異なっていた．本

Table 1.　ファン心理の因子分析

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
Aの容姿はバランスがとれていると思う	.929	.036	−.016	−.035	.051	−.113	−.089
Aはスタイルがいいと思う	.914	.019	.058	.040	.121	−.152	−.121
Aはスタイルが良い	.906	−.063	−.032	.003	−.066	.014	−.016
Aの外見は,私にとってとても魅力的だ	.878	−.079	−.158	.041	−.017	.053	−.046
Aは目鼻立ちが整っている	.836	−.052	−.031	−.065	.000	−.031	.001
Aの容姿を見ると,惚れ惚れする	.793	−.027	−.056	−.006	−.001	.139	.012
Aはファッションセンスが良い	.664	.078	.072	.076	−.023	−.070	.003
Aは自分の外見に自信がありそうだ	.632	−.126	.215	.041	.095	−.074	−.072
Aの作品(音楽・本・演技・プレーなど)に感動した	−.037	.910	−.044	−.118	.172	−.113	−.080
Aの作品(音楽・本・演技・プレーなど)の世界に引き込まれる	.016	.876	.082	−.152	−.003	−.066	−.036
Aの作品(音楽・本・演技・プレーなど)は心に残る	−.184	.809	.045	.014	.070	−.006	−.113
Aの作品(音楽・本・演技・プレーなど)はレベルが高いと思う	−.034	.796	.026	.124	−.119	−.168	−.079
Aの作品(音楽・本・演技・プレーなど)は私にパワーをくれる	−.063	.641	−.215	−.029	.212	.112	−.119
Aをとても尊敬している	.020	.638	−.047	.351	−.036	−.118	.053
Aが人気者で嬉しい	.095	.433	.243	−.124	−.373	.085	.081
Aは人に対して思いやりがあると思う	−.054	.428	−.071	.058	.022	.104	−.127
Aのファンに出会うと嬉しくなる	.206	.413	−.045	.033	−.258	.058	.300
Aは,私にはとてもできないようなことをしているから,好きだ	.078	.392	−.012	.100	−.256	.062	.292
Aはメジャーだから好きだ	−.105	.026	.782	.031	.065	.017	.053
Aは世間一般に人気があるから好きだ	−.039	.075	.679	.072	.068	−.005	−.066
Aが流行するようになってから,好きになった	.003	−.109	.660	.067	−.130	−.064	−.059
マス・メディアなどでよく取り上げられているので,Aに興味を持った	−.016	−.029	.590	.204	−.152	−.052	−.065
Aは芸能界という市場の商品だ	.122	−.031	.449	−.214	−.016	−.141	.090
有名になってからのAしか知らない	.090	.014	.427	−.096	−.072	−.290	−.076
将来,Aのようになりたい	.000	−.094	.055	.801	−.056	.001	.095
Aのような生き方をしたい	.007	.055	.058	.748	.149	.075	−.070
Aと私とは共通点があるので嬉しい	.026	.128	−.043	.509	.216	.024	.048
Aに自分を重ね合わせてみる	−.093	−.027	.335	.471	.171	.169	.066
Aにあこがれている	.282	.182	−.010	.440	−.097	.153	.009
Aが有名になってしまうと,嫌だと思う	.062	.007	−.242	.117	.830	−.255	.050
Aが売れてしまったら,寂しい	.040	.057	−.121	.032	.783	−.069	.092
他にAのことを好きなファンがいると,不愉快になる	−.005	−.102	.237	.040	.747	−.027	−.036
Aは鑑賞する対象でしかない	.109	.163	.204	−.249	.151	−.773	.013
テレビや試合会場で見る以上に関わりを持ちたいとは思わない	.088	.061	.088	−.008	.181	−.710	.098
Aから遠ざかっていたい	.059	.026	−.011	.045	.109	−.611	.404
特に個人的な感情は抱かない	−.028	−.014	−.011	−.094	.014	−.571	.282
Aに対する気持ちは,恋愛感情に近い	.161	−.004	.068	−.249	.189	.508	.155
Aなしで過ごすのは辛い	.007	.252	.001	−.001	.200	.440	.089
Aのことを思うと,ドキドキする	.303	.075	−.012	−.043	.158	.411	.139
気がつくと,いつもAのことを考えている	−.017	.047	.207	−.102	.274	.383	.188
Aをなぐりたい	−.128	−.116	−.082	.002	−.006	−.067	.780
Aに文句を言ってやりたい	−.166	−.026	−.094	−.072	.053	−.157	.744
Aに反感を感じる	−.026	−.020	.087	.060	.082	−.170	.628
心を入れ替えさせたい	.063	−.101	.001	.242	.072	−.068	.521

Table 2.　ファン行動因子分析

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
ファンレターやプレゼントをおくる（前）	.905	−.142	−.003
ファンレターやプレゼントをおくる（後）	.832	−.069	.086
A 自身の HP やブログに書き込みをする（後）	.737	−.279	.394
A 自身の HP やブログに書き込みをする（前）	.717	−.288	.378
A が使用している商品を買う（前）	.705	.028	.151
ファンクラブに入る（前）	.628	.227	.042
A が使用している商品を買う（後）	.626	.144	.111
A が出演している CM の商品を買う（前）	.613	.095	.127
グッズを買う（前）	.561	.376	−.068
暗証番号・PC の ID を A にちなんだものにする（前）	.559	.250	−.166
ファンクラブに入る（後）	.550	.280	.122
A が出演している CM の商品を買う（後）	.535	.222	.146
グッズを買う（後）	.506	.472	−.079
暗証番号・PC の ID を A にちなんだものにする（後）	.436	.344	−.135
パソコンや携帯で A の画像や情報を探したり，映像を視聴する（後）	−.164	.798	.253
A が載っている雑誌を買う（後）	.092	.720	.096
A が出ている番組（ドラマ・映画・音楽番組・バラエティ・試合中継等）をテレビで見る（後）	−.204	.703	.170
DVD もしくは CD を買う（前）	.292	.656	−.195
DVD もしくは CD を買う（後）	.329	.637	−.198
パソコンや携帯で A の画像や情報を探したり，映像を視聴する（前）	−.080	.608	.160
A が出ている番組（ドラマ・映画・音楽番組・バラエティ・試合中継等）をテレビで見る（前）	−.137	.599	.080
イベント・試合・コンサート・舞台・映画館等に足を運ぶ（後）	.322	.596	−.051
イベント・試合・コンサート・舞台・映画館等に足を運ぶ（前）	.335	.585	−.052
A 自身の HP やブログを見る（前）	.017	.547	.333
A が載っている雑誌を買う（前）	.214	.526	.115
A 自身の HP やブログを見る（後）	−.054	.508	.435
SNS のコミュニティに入る（後）	.001	.100	.820
SNS のコミュニティに入る（前）	−.039	.146	.770
自分自身の HP に A のことを書く（後）	.214	.049	.634
自分自身の HP に A のことを書く（前）	.195	.092	.573

研究では，スキャンダルの前後でファン行動の変化を検証することが目的であるため，今回は前後の項目を合算して共通の因子構造を抽出した上で，前後別に得点化を行うこととした．スキャンダル前後を合わせた計 30 項目について因子分析（主因子法，Promax 回転）を行ったところ，固有値

の減衰状況や項目内容から，3因子構造と判断された（Table 2）．第1因子は「ファンレターやプレゼントをおくる」，「ファンクラブに入る」といった，対象本人へ接近していく行動を示す項目が高く負荷していることから「本人への接近」（前 $M=2.02$, $SD=0.87$, $\alpha=.909$；後 $M=2.08$, $SD=0.89$, $\alpha=.918$），第2因子は「画像や情報を見る」，「DVD や CD を買う」といった項目が高く負荷していることから「情報収集・作品鑑賞」（前 $M=2.86$, $SD=0.88$, $\alpha=.868$；後 $M=2.80$, $SD=$, 0.93, $\alpha=.896$），第3因子は「SMS のコミュニティに入る」，「自分の HP に書く」の2項目が高く負荷していることから「ファン・ネットワーク拡大」（前 $M=2.30$, $SD=1.10$, $\alpha=.786$；後 $M=2.24$, $SD=1.10$, $\alpha=.817$）と命名された．

スキャンダル後の感情26項目について因子分析（主因子法，Promax 回転）を行い，固有値の減衰状況や項目内容から，5因子構造と判断した（Table 3）．第1因子は「がっかりする」，「悲しい」などの「失望」（$M=3.11$, $SD=0.97$, $\alpha=.836$），第2因子は「いてもたってもいられない」，「いらいらする」などの「「動揺」（$M=3.13$, $SD=1.00$, $\alpha=.887$），第3因子は「何もしたくない」，「A がスキャンダルを起こしたことを忘れようとする」などの「現実逃避」（$M=2.37$, $SD=0.81$, $\alpha=.638$），第4因子は「A ならやりかねない（逆転）」，「A はそんなことをするはずがない」などの「否定」（$M=3.85$, $SD=0.82$, $\alpha=.603$），第5因子は「誰もがするだろう」などの「一般化」（$M=2.82$, $SD=$, 1.03 $\alpha=.636$）と命名された．

スキャンダル後の行動9項目について（主因子法，Promax 回転）を行い，固有値の減衰状況や項目内容から，3因子構造と判断した（Table 4）．第1因子はマス・メディアなどでスキャンダルに関する情報を検索する「情報検索」（$M=3.49$, $SD=1.07$, $\alpha=.867$），第2因子はファンをやめる「ファン離脱」（$M=1.92$, $SD=0.94$, $\alpha=.674$），第3因子はスキャンダルを許し，応援しつづける「スキャンダル許容」（$M=3.68$, $SD=$, 0.86 $\alpha=.448$）と命名された．

各尺度について得点を合計し，項目数で割ったものを尺度得点として，

Table 3.　スキャンダル後感情の因子分析

	I	II	III	IV	V
がっかりする	.855	−.100	.008	.135	.053
悲しい	.749	.156	−.068	.112	.075
残念に思う	.723	.058	−.094	.032	.050
今後のファンとしての行動をどうするか悩む	.721	−.111	.193	−.277	−.069
Aの評価が下がる	.600	−.112	−.150	.046	−.006
みじめだ	.489	.150	.099	−.173	−.031
いろいろなことが頭をよぎる	−.171	1.043	−.138	−.058	−.005
いてもたってもいられない	.038	.829	−.020	.033	−.023
いらいらする	.005	.710	.116	.066	−.100
とまどいを感じている	.317	.477	.012	−.112	−.032
裏切られたように感じる	.358	.469	.076	.031	−.100
このスキャンダル行動をせざるを得ない理由があったに違いない	.085	.448	−.081	.043	.215
マスコミが勝手な解釈をして誇張しているかもしれない	.075	.424	−.180	.095	.361
気分が沈んで憂鬱（ゆううつ）である	.321	.399	.181	.149	−.126
何もしたくない	.226	−.172	.721	−.002	−.018
誰にも話しかけられたくない	−.076	.204	.625	−.234	−.122
Aがスキャンダルを起こしたことを忘れようとする	−.025	.079	.624	.177	.124
このスキャンダルに関して考えない	−.155	−.239	.573	.341	.079
スキャンダルに関わった別の人間のせいであり，本人は悪くない	−.076	.333	.390	.125	.235
Aならやりかねない	.101	.009	−.084	−.677	.206
Aはそんなことをするはずがない	−.035	.202	.083	.596	−.045
わくわくする	−.032	.017	.349	−.405	.066
意外だ	.235	−.019	.091	.376	.039
人間誰しもがそういうところはあって，完璧でないから仕方ない	.034	−.036	.009	−.150	.836
こんなスキャンダルは誰もがすることだろうと思う	−.093	.029	.268	−.267	.543

Table 4.　スキャンダル後行動の因子分析

	I	II	III
週刊誌でAのスキャンダルについての記事を読む	.880	.038	−.013
スポーツ新聞でAのスキャンダルについての記事をチェックする	.837	.022	.000
テレビでAのスキャンダルについてチェックする	.823	.062	.046
パソコンでAのスキャンダルについて検索する	.722	.058	.037
何も行動を起こさない	−.600	.093	.272
ファンをやめる	.019	.901	−.020
他にお気に入りの芸能人を見つける	.101	.629	.157
Aを許す	−.171	.125	.690
変わらず応援し続ける	.218	−.365	.380

以降の分析に用いた．

スキャンダル場面によるスキャンダル後感情・行動の比較

場面を独立変数，スキャンダル後感情5因子およびスキャンダル後行動3因子を従属変数とする一元配置分散分析を行った（Table 5）．その結果，スキャンダル後感情の「現実逃避」と「一般化」においては，麻薬場面の方が脱税場面よりも得点の低い傾向が認められた．また，スキャンダル後行動の「ファン離脱」においては暴行場面の方が脱税場面よりも得点が低く，「スキャンダル許容」においては不倫場面の方が麻薬場面や脱税場面よりも得点の高い傾向が認められた．これらのことから，「失望」や「動揺」といったスキャンダルの衝撃やスキャンダル自体の「否定」，スキャンダル後に積極的に情報検索を行うことは，どのスキャンダルにも共通しているものの，麻薬は「現実逃避」や「一般化」が起こりにくいこと，暴行はファン離れがほとんどないこと，不倫はファンから比較的許容されることが明らかになった．

スキャンダルによるファン行動の変化

スキャンダルによるファン行動の変化を検証するために，スキャンダル

Table 5.　スキャンダル場面によるスキャンダル後感情・行動の比較

	不倫			麻薬			暴力			脱税					
	N	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*df*	*F*	下位検定
失望	64	2.89	1.17	45	3.29	0.83	71	3.19	0.84	74	3.11	0.96	3,250	1.81	
動揺	64	3.15	1.18	45	3.02	0.98	71	3.30	0.87	73	3.01	0.97	3,249	1.17	
現実逃避	64	2.28	0.80	45	2.08	0.79	71	2.44	0.84	74	2.56	0.76	3,250	3.77*	脱税>麻薬*
否定	64	3.90	0.82	45	3.88	0.86	71	3.92	0.85	74	3.73	0.76	3,250	0.80	
一般化	64	2.90	1.05	45	2.42	1.04	71	2.87	1.04	74	2.96	0.95	3,250	2.92*	脱税>麻薬*
情報検索	64	3.38	1.15	45	3.60	1.05	71	3.67	0.99	74	3.36	1.05	3,250	1.42	
ファン離脱	64	1.78	0.83	45	2.02	1.02	71	1.74	0.89	74	2.16	1.00	3,250	3.12*	脱税>暴力*
スキャンダル許容	64	3.95	0.81	45	3.40	0.92	71	3.80	0.82	74	3.51	0.81	3,250	5.37**	不倫>麻薬**，不倫>脱税*

場面別に，スキャンダルの前後でファン行動の得点を比較した（Table 6）．その結果，不倫場面ではスキャンダル前後でファン行動に差は見られなかったが，麻薬場面では「情報収集・作品鑑賞」がスキャンダル後に低下，暴行場面では「本人への接近」が上昇，脱税場面では「情報収集・作品鑑賞」がやや低下する傾向が認められた．

前項の結果と合わせて考えると，不倫は，スキャンダル自体が比較的容認されているためにファン行動に影響はないが，麻薬は認知的不協和解消の余地がなく，もっとも一般的なファン行動である作品鑑賞（小城，2004）を含む「情報収集・作品鑑賞」が低下することから，ファン離れが致命的なスキャンダルであると考えられる．一方，暴行は，たとえば正当防衛や酩酊状態など，事情によっては情状酌量の余地があり，積極的に応援メッセージを送るなどの行動が増加すると推測される．また，脱税は，作品の売上と直接的に関連しているために「情報収集・作品鑑賞」の低下につながっている可能性がある．

スキャンダル場面別の規定関係の解明

スキャンダル場面別に，ファン心理，スキャンダル後感情・行動，ファン行動の変化量の規定関係を解明するために，パス解析を行った．まず，第1水準は，ファン心理7因子を説明変数，スキャンダル後感情5因子を目的変数，第2水準はファン心理とスキャンダル後感情を説明変数，スキ

Table 6. スキャンダル前後のファン行動の比較

場面	ファン行動		*M*	*N*	*SD*	*df*	*t*	
不倫	本人への接近	前	2.01	64	0.88	63	0.920	*n.s.*
		後	2.05	64	0.91			
	情報収集・作品鑑賞	前	2.96	64	0.91	63	0.532	*n.s.*
		後	2.93	64	1.02			
	ファン・ネットワーク拡大	前	2.37	64	1.11	63	1.567	*n.s.*
		後	2.27	64	1.08			
麻薬	本人への接近	前	1.86	44	0.86	43	0.131	*n.s.*
		後	1.87	44	0.86			
	情報収集・作品鑑賞	前	2.82	45	0.93	44	2.162	*
		後	2.67	45	0.97			
	ファン・ネットワーク拡大	前	1.85	44	1.04	43	0.969	*n.s.*
		後	1.76	44	1.04			
暴行	本人への接近	前	2.13	71	0.88	70	3.257	**
		後	2.23	71	0.94			
	情報収集・作品鑑賞	前	2.93	71	0.84	70	0.33	*n.s.*
		後	2.95	71	0.88			
	ファン・ネットワーク拡大	前	2.39	70	1.11	69	0.096	*n.s.*
		後	2.39	70	1.12			
脱税	本人への接近	前	2.03	74	0.85	73	1.426	*n.s.*
		後	2.10	74	0.83			
	情報収集・作品鑑賞	前	2.72	74	0.85	73	1.981	†
		後	2.61	74	0.85			
	ファン・ネットワーク拡大	前	2.43	74	1.07	73	0.748	*n.s.*
		後	2.39	74	1.06			

† $p<.10$ $^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$ $^{***}p<.001$

ャンダル後行動3因子を目的変数，第3水準はファン心理，スキャンダル後感情，スキャンダル後行動を説明変数，ファン行動3因子のスキャンダル後の変化量（前後差）を算出したものを目的変数として，重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（Figure 1-1～1-4）.

以下では，認知的不協和解消パターンを中心に結果の解釈と考察を行う.

不倫場面

不倫場面の規定関係をFigure 1-1に示す.「作品の評価」「流行への反発・独占」「疑似恋愛感情」「流行への同調」の高いファンほど「動揺」し，また，「流行への反発・独占」「流行への同調」の高いファンほど「現実逃避」し，スキャンダル後に「情報検索」を行い，「情報収集・作品鑑賞」が低下する．また，「作品の評価」「流行に同調」していたファンほど，スキャンダル後にファンを離脱し，「情報収集・作品鑑賞」が低下する．ただし，「流行に同調」しているファンが不倫を「一般化」した場合は，スキャンダルを許容する．一方，「嫌悪」していたファンは，逆に積極的にスキャンダル後に「本人への接近」「情報収集・作品鑑賞」が増加する．「外見的魅力」のファンは，スキャンダル後に「ファン・ネットワーク拡大」が増加する.

不倫場面で中心的な規定因となっているのが，「流行への同調」，「流行への反発・独占」，「作品の評価」である．これら3つのファン心理の側面におおよそ共通しているのは，以下の3つのパターンに大別されることである．第1は，多くの衝撃を受けるものの，最終的にはスキャンダルを許容，第2は衝撃を受けてスキャンダルに関する情報を検索し，不協和を増加させるような情報を避けるために「情報収集・作品鑑賞」が低下，第3はファンはやめるが，本人と作品を切り離すことで積極的に作品鑑賞，である．「流行への反発・独占」は，さらに「現実逃避」して一切のスキャンダル情報を回避するパターンが存在する.

一方，疑似恋愛感情を抱いているファンにとって，不倫スキャンダルは

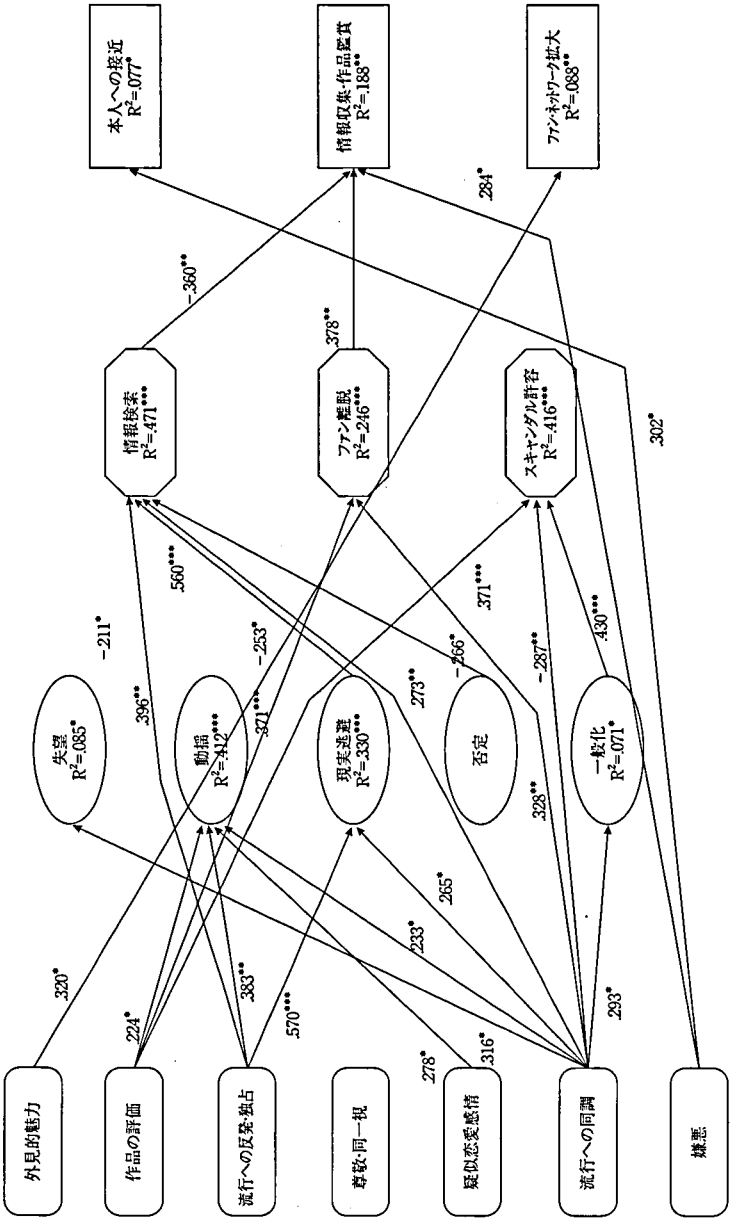

Figure 1-1. 不倫場面におけるパス図

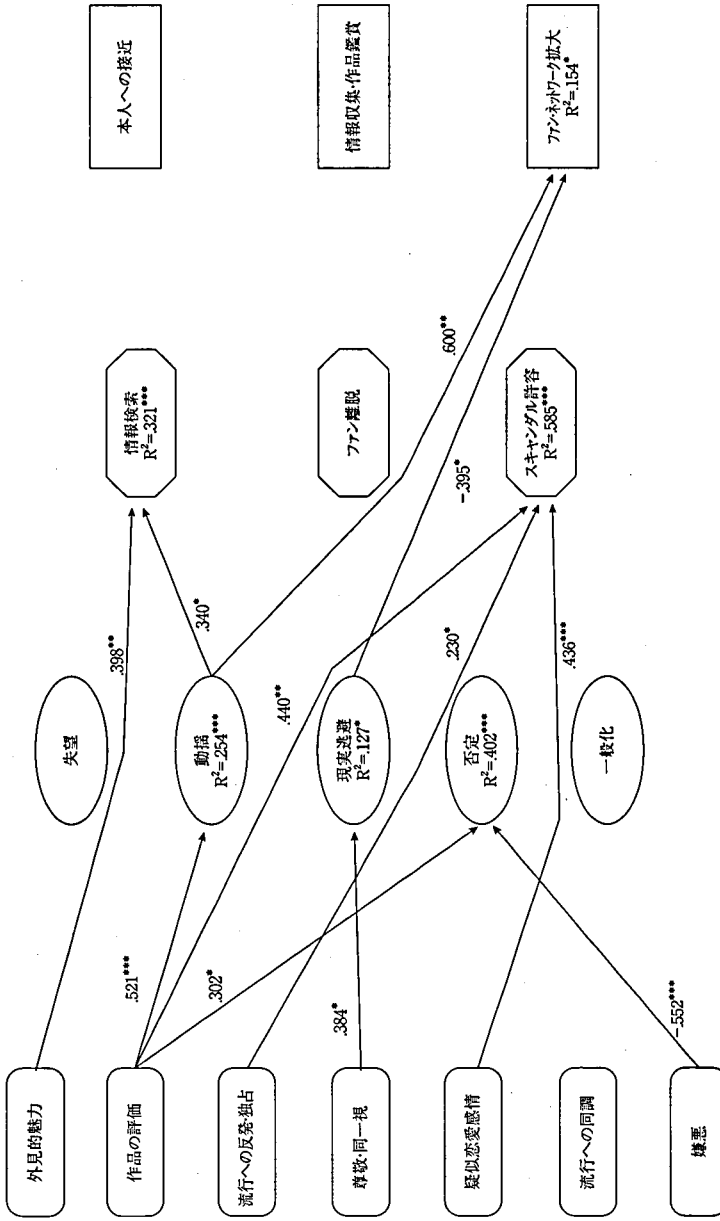

Figure 1-2.　麻薬場面におけるパス図

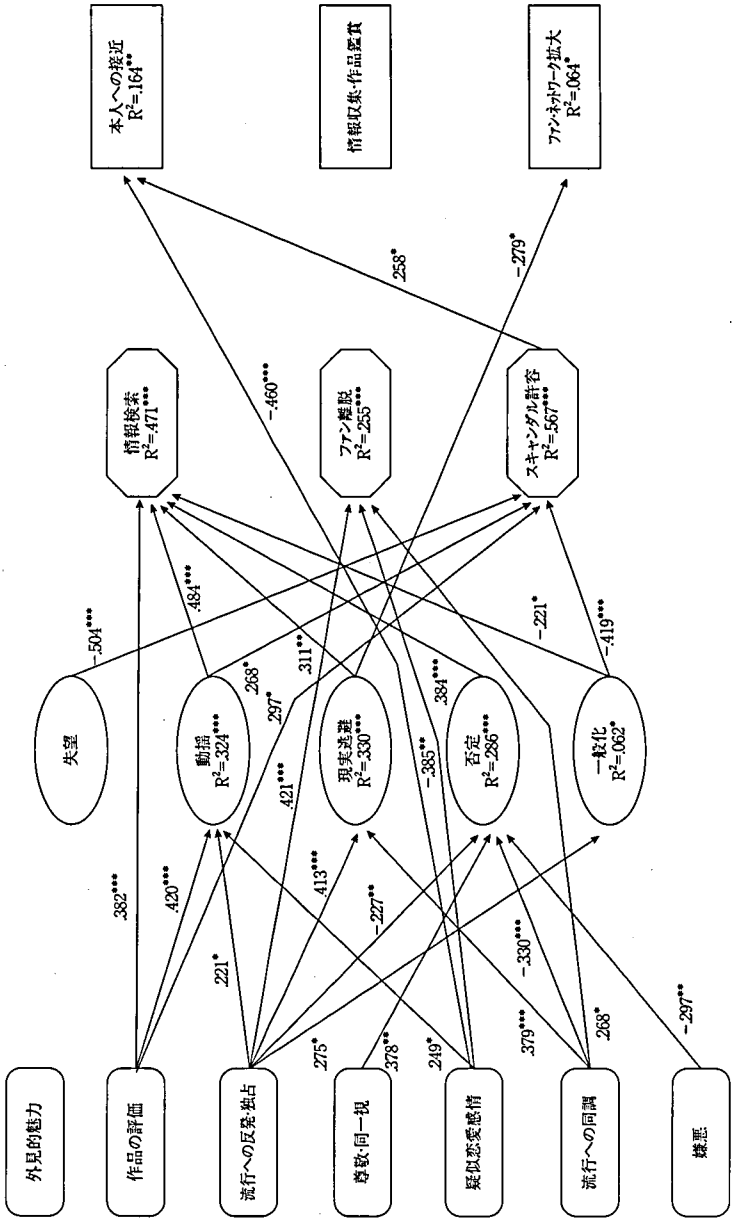

Figure 1-3. 暴行場面におけるパス図

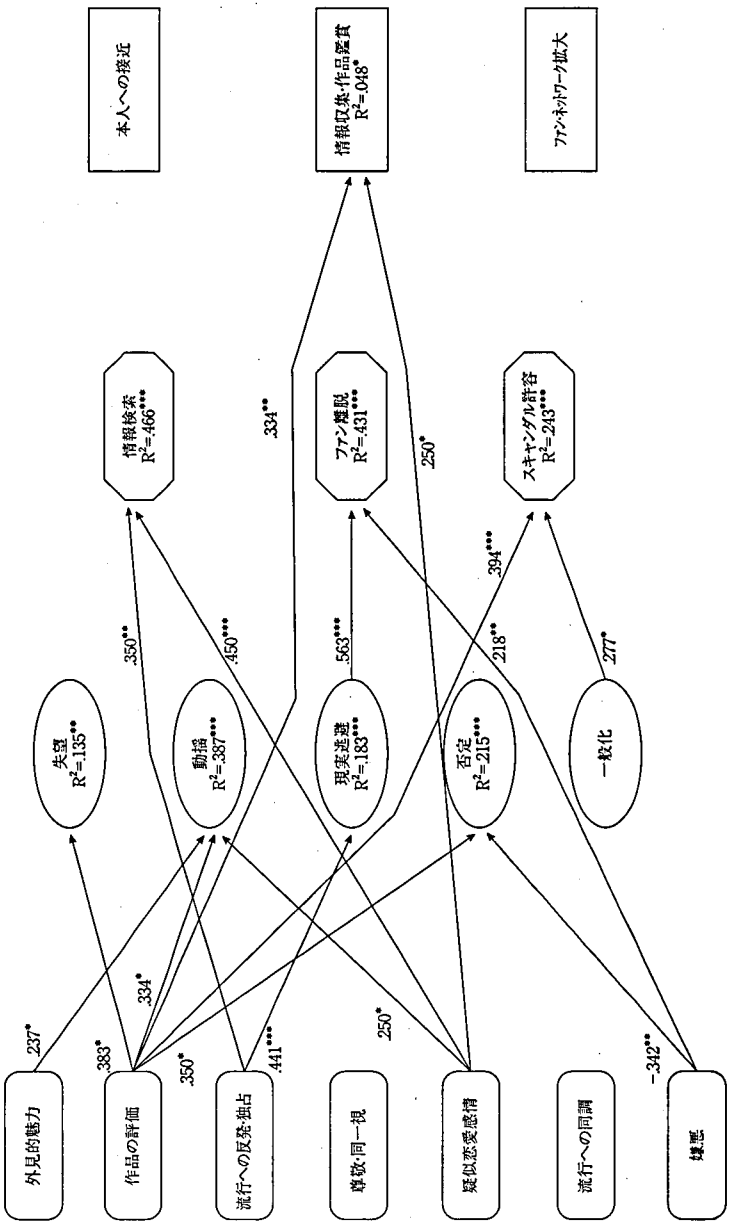

Figure 1-4.　脱税場面におけるパス図

ストレスフルな状況である．このようなファンは動揺して，積極的にスキャンダルに関する情報を検索する傾向がある．スキャンダルを否定する情報を求めているとも推察されるが，結果的に肯定する情報しか得られないために不協和が強くなり，さらなる不協和を避けるために「情報収集・作品鑑賞」が低下するという解釈も可能である．

「嫌悪」の強いファンは，堕ちていく姿を楽しむためにスキャンダル後の情報収集や，本人への接近が増加すると推察される．

麻薬場面

麻薬場面の規定関係を Figure 1-2 に示す．「作品の評価」の高いファンは，「動揺」して，スキャンダル後に「情報検索」し，「ファン・ネットワーク拡大」が増加する．また，「外見的魅力」のファンも「情報検索」を行う．一方，「作品の評価」，「流行への反発・独占」，「疑似恋愛感情」の高いファンほど，スキャンダルを許容する．

「尊敬・同一視」していたファンは「現実逃避」し，「ファン・ネットワーク拡大」が低下する．

麻薬場面で，特に中心的な規定因となっているのが「作品の評価」である．作品を評価しているファンの認知的不協和解消パターンは，以下の3つに分かれると考えられる．第1は，麻薬スキャンダルに動揺し，スキャンダルの情報を検索，第2は動揺してファン同士の交流を活性化，第3はスキャンダルを許容，である．特徴的なのは，本人と作品を切り離すという認知的不協和解消のパターンが見られないことである．

また，本人への情緒的関与を示す「流行への反発・独占」と「疑似恋愛感情」は，それぞれスキャンダルを許容する傾向がある．

暴行場面

暴行場面の規定関係を Figure 1-3 に示す．「流行への反発・独占」の高いファンは，スキャンダル後に「動揺」し，「現実逃避」するが，「否定」

はせずに「一般化」して，積極的に「情報検索」を行ったり，「スキャンダル許容」したりする．「作品の評価」や「疑似恋愛感情」の高いファンも，「動揺」して，「情報検索」や「スキャンダル許容」を行う．スキャンダルを許容すれば，「本人への接近」行動がスキャンダル後に増加する．一方，「流行への反発・独占」「流行への同調」の高いファンほど，「疑似恋愛感情」の低いファンほど，「ファン離脱」する．

暴行場面で，中心的な規定因となっているのは，「作品の評価」，「流行への反発・独占」，「疑似恋愛感情」，「流行への同調」である．対照的なのは，「作品の評価」と「流行への同調」の認知的不協和解消パターンで，前者はスキャンダルを許容するが，後者はファン離脱を選択する．「流行への反発・独占」と「疑似恋愛感情」は，その両方のパターンを持っている．

脱税場面

脱税場面の規定関係をFigure 1-4に示す．「流行の反発・独占」「疑似恋愛感情」の高いファンほど，スキャンダル後に「情報検索」を行う．一方，「流行の反発・独占」の高いファンは「現実逃避」して「ファン離脱」する．「嫌悪」の高いファンも「ファン離脱」する．「作品の評価」の高いファン，スキャンダル後に「一般化」するファンほど，スキャンダルを許容する．また，「作品の評価」「疑似恋愛感情」の高いファンは，スキャンダル後に「情報検索・作品鑑賞」が増加する．

脱税場面で中心的な規定因となっているのは，「作品の評価」，「流行への反発・独占」，「嫌悪」である．「流行への反発・独占」，「嫌悪」の高いファンは，ファンをやめることで認知的不協和を解消するが，「作品の評価」の高いファンはスキャンダルを許容する．

ファン心理の観点から見た認知的不協和解消

前項までは場面別に規定関係を解釈してきたが，これらの結果から，認

知的不協和解消パターンは，以下の5つに大別される．第1に，既存の態度を維持するパターンで，ファンの持続（「ファン離脱」の負）やスキャンダルの許容，ファン行動の維持・増加などが該当する．第2に既存の態度を一部維持するパターンで，たとえば，ファンはやめるが，本人と作品を切り離して作品のみを評価するといった，スキャンダルとは直接関連のない側面の過大評価が該当する．第3に，既存の態度を変容させるパターンである．すなわち，スキャンダルを許さなかったり，ファンを離脱したり，ファン行動を低下させたりするなどである．第4に，スキャンダル情報の検索やファン同士の交流を避け，不協和を増大させる情報や状況を回避するパターンである．第5に，第4のパターンとは正反対に，積極的にスキャンダル情報を収集したり，ファン同士で交流したりして，緊張状態を解消するパターンである．後二者は，スキャンダルを許容するか，ファンを離脱するか，結論を保留している態度であるが，それだけ不協和が大きいと推察される．

Figure 1-1〜1-4のパス図に基づいて，上記の5つのパターンとファン心理の規定関係を整理したものがTable 7である．なお，「嫌悪」は，不倫場面と暴行場面において，積極的にスキャンダル情報を収集し，スキャンダル後に本人への接触や作品鑑賞が増加するという規定関係が見られたが，これは，スキャンダルによって堕ちていく姿を楽しむ心理であると解釈される．既存の態度自体がネガティブであるために，態度の維持・変容といった認知的不協和解消が，他のファン心理の側面とは逆方向になることから，本項では解釈から除外する．

(1) 既存の態度維持

どの場面にも共通して既存の態度維持を規定していたのは，「作品の評価」である．すなわち，楽曲や演技力，プレーといった作品のクオリティを高く評価しているファンは，スキャンダルにさまざまな動揺や衝撃を受けつつも，最終的にはスキャンダルを許容し，ファンを続けると考えられる．

Table 7.　認知的不協和解消パターンとファン心理との関連

		態度維持	一部維持	態度変容	情報回避	緊張解消
外見的魅力	不倫					○
	麻薬					○
	暴行					
	脱税					
作品の評価	不倫	○	○			○
	麻薬	○				○
	暴行	○				○
	脱税	○				○
流行への反発・独占	不倫					○
	麻薬	○				
	暴行	○		○		○
	脱税			○		○
尊敬・同一視	不倫					
	麻薬				○	
	暴行				○	
	脱税					
疑似恋愛感情	不倫					○
	麻薬	○				
	暴行	○				○
	脱税	○				○
流行への同調	不倫	○	○	○		○
	麻薬					
	暴行	○		○		○
	脱税					

一方，「疑似恋愛感情」も，麻薬，暴行，脱税の3場面において，既存の態度維持を規定しており，本人に対して強い情緒的関与の高いファンは，態度変容に伴うストレスの方が大きく，スキャンダルさえも受け入れるといえる．この結果は，恋愛感情に依存や奉仕の特徴がある（松井，1993）ことと整合的である．しかし，不倫だけは，「疑似恋愛感情」の高いファンにとって受け入れがたいスキャンダルであるために，既存の態度維持にもストレスが強く，規定関係が見出されなかったと考えられる．後述のように，「疑似恋愛感情」の高いファンが不倫スキャンダルに直面したとき，

本人と作品とを切り離すことによる態度の一部維持もできず，といって，きわめて情緒的関与が強いためにファンを離脱する（態度を変容する）こともままならず，最終的に態度を保留して，積極的に情報を収集して緊張緩和を図ることへ逃避すると推察される．

「流行への反発・独占」は，麻薬場面と暴行場面において既存の態度維持を規定していた．「流行への反発・独占」は，大衆に消費されることを嫌い，自分だけのものにしておきたいというファン心理で，本人へ執着・固執し，「疑似恋愛感情」よりも本人への憑依傾向が強いという特徴がある（小城，2004）．このことから，麻薬や暴行の場合は，スキャンダルを非難するよりも，そこに至った本人の心情を理解したいという思いが強いと推察される．また，前述したように，不倫や脱税は比較的容認されやすく，一般化が行われやすいが（Table 5），麻薬や暴行の場合はダメージが大きいために，スキャンダルによって本人が表舞台から姿を消すことで，自分だけが独占でき，理解者になれるという満足感をもたらすと推察される．しかしながら，後述のように，暴行場面においては，「流行の反発・独占」が態度変容の規定因ともなっており，重層的な構造であることが指摘される．

「流行への同調」は，不倫場面と暴行場面において，既存の態度維持を規定していた．「流行への同調」は，ブームに乗っただけのにわかファンで（小城，2004），関与が表面的で，スキャンダルに伴う不協和がもっとも少ないと考えられる．しかしながら，後述のように，「流行への同調」は，この2場面において態度変容の規定因ともなっている．すなわち，にわかファンは，認知的不協和が少ないために，態度の一部維持といった周辺的な解消パターンや，情報回避や緊張解消といった問題の先送りのパターンを選択せず，態度維持か態度変容かの決定が容易であると推察される．これが不倫場面と暴行場面に限定されているのは，不倫は比較的容認されやすいこと，暴行はファン離脱がほとんどないことが関連していると考えられる．

(2) 既存の態度の一部維持

既存の態度の一部維持を規定していたのは，不倫場面における「作品の評価」と「流行への同調」のみであった．不倫は比較的容認されやすいスキャンダルであることから（Table 5），作品を評価しているファンは，容易に本人と作品とを切り離して考えることができ，また，ブームに乗っただけのにわかファンも，不倫を一般化することで不協和解消が可能であったと考えられる．

(3) 既存の態度変容

既存の態度変容を規定していたのは，不倫場面における「流行への同調」，暴行場面における「流行への反発・独占」と「流行への同調」，脱税場面における「流行への反発・独占」であった．

「流行への同調」はブームに乗っただけのにわかファンであるため，不倫や暴行場面においては，前述の態度維持を規定するパターンと同様に，態度変容の決定も容易であると考えられる．

一方，「流行への反発・独占」も，暴行場面において態度維持と態度変容の両方のパターンを規定しているが，こちらは，本人への情緒的関与が強い側面であることから，態度の維持・変容の決定が容易なわけではなく，本人の心情を理解したいという強い憑依の側面と（前述），ファンを離脱する側面がアンビバレントに共存していると推察される．他の3場面に比べて，暴行は身体的・物理的被害を他者に及ぼすスキャンダルであることが関連している可能性もあるが，もともと暴行場面では「ファン離脱」の得点がきわめて低い（Table 5）ことを踏まえれば，「流行への反発・独占」の低いファンが態度を変容するという解釈も可能である．

脱税場面の場合は，金銭欲が絡んだ世俗性やメジャー性と関連しているために，大衆に消費されることを嫌う，独占欲の強いファンは失望して離脱すると推察される．

(4) 情報回避

情報回避を規定していたのは，麻薬場面と暴行場面における「尊敬・同

一視」であった．不倫場面と脱税場面において，「尊敬・同一視」との規定関係が見られなかったのは，この2場面は比較的容認されやすく，一般化が行われやすいためと考えられる（Table 5）．また，「尊敬・同一視」が認知的不協和解消パターンを規定していたのは情報回避のみで，既存の態度維持や態度変容などとは関連が見られなかった．

これらのことから，「尊敬・同一視」の高いファンは，本人への情緒的関与が高いためにファンをやめることはできず，本人を作品と切り離すという解消パターンも選択できないが，一方で，尊敬していた対象の麻薬や暴行のスキャンダルを許容することもできず，強い不協和状態に陥ったと推察される．また，このとき，同じ結論の先送りでも，積極的に情報を検索し，ファン同士で交流する「緊張解消」が選択されないのは，スキャンダルの特性が反社会的であるために，情報検索やファン同士の交流はネガティブな情報にさらされることになり，さらに不協和を増大するためと考えられる．「尊敬・同一視」は，「疑似恋愛感情」や「流行への反発・独占」と同じく，本人への情緒的関与を示す側面であるが，スキャンダルを許容しないところが「疑似恋愛感情」や「流行への反発・独占」とは異なる点である．「疑似恋愛感情」や「流行への反発・独占」が，犯罪さえも許容する盲目的な心理であるのに対して，「尊敬・同一視」は正義や倫理といった社会的望ましさに立脚した心理であることを示唆している．

(5) 緊張解消

どの場面にも共通して緊張解消と規定関係が見られたのは，「作品の評価」である．既存の態度維持と同じく，作品を高く評価しているファンはスキャンダルに動揺し，ひとまず緊張解消のために積極的に情報収集やファン同士の交流を図ると考えられる．

また，本人への情緒的関与を示す「流行への反発・独占」と「疑似恋愛感情」も，不倫，暴行，脱税の3場面において規定関係が見られた．麻薬場面のみ規定関係が見られなかったが，麻薬は現実逃避や一般化が起こりにくく，スキャンダルが許容されないこと（Table 5）や，スキャンダル

後のファン行動が低下する（Table 6）ことが背景にあると推察される．

「外見的魅力」は不倫場面と麻薬場面，「流行への同調」は不倫場面と暴行場面に規定関係が見られた．どちらも，関与が表面的で，スキャンダルによる不協和は小さいファン心理の側面である．この場合，スキャンダルに衝撃を受けているというよりも，半ばスキャンダルを楽しみ，コミュニケーション促進のために話題として利用しているとも解釈できる．

総　括

本研究では，スキャンダルのタイプとファン心理の違いに着目し，場面想定法を用いてスキャンダルに直面したときのファンの心理を分析した．

不倫スキャンダルは許容される傾向が高く，また，スキャンダル前後でファン行動に変化は見られなかったことから，比較的ダメージが小さいスキャンダルであると考えられる．また，他のスキャンダルに比べて，作品と本人とを切り離すことが容易で，態度の一部維持という不協和解消パターンが可能である．しかし，「疑似恋愛感情」の高いファンには強烈な不協和をもたらし，ブームに乗っただけのにわかファンは離れていくという危険性をはらんでいる．関与の低いファンには，格好のゴシップネタにされることも示唆される．

麻薬スキャンダルは一般化や現実逃避が起こりにくく，ファン行動の中心である「情報収集・作品鑑賞」がスキャンダル後に低下することから，ファン離れが致命的なスキャンダルと考えられる．しかし，その中でも，作品を高く評価していたり，本人への情緒的関与の強かったりするファンは，スキャンダルを許容してファンを続けようとする傾向があり，このようなファンが麻薬に容認的な風潮を作り出しているともいえる．一方，「尊敬・同一視」の強いファンは強い不協和に陥り，態度維持も態度変容も選択できずに，またネガティブなスキャンダル情報にさらされることにも耐えられず，情報回避という手段を取る傾向が強い．

暴行スキャンダルはファン離れがほとんどなく，スキャンダル後には本人への接近が増加しており，作品を評価しているファンも，本人への情緒的関与の強いファンも，態度を維持してファンを続ける傾向が強かった．ただし，ブームにのっただけのにわかファンは，スキャンダルを機にファンを離脱する傾向があった．しかし，「流行への反発・独占」の強いファンは，態度維持と態度変容の両方のパターンをとることから，この点については，さらなる検討が必要である．また，麻薬スキャンダルと同様に，「尊敬・同一視」の高いファンが強烈な不協和に陥り，情報回避を選択することから，麻薬と暴行は，人生のあり方や生き方に反する点で共通性があるものと見られる．

脱税スキャンダルの場合，作品を高く評価しているファンや，疑似恋愛感情の強いファンはスキャンダルを許容するが，大衆に消費されることを厭うファンは，ファンを離脱する傾向がある．後者は，スキャンダルの特性が，金銭欲やメジャー性に関連しているためと考えられる．

総じて，作品を評価しているファン，本人への情緒的関与の強いファンは，スキャンダルを許容する傾向にあり，ブームに乗っただけのにわかファンは，ファンを離脱する傾向があるといえる．ただし，不倫スキャンダルにおける「疑似恋愛感情」や，麻薬・暴行スキャンダルにおける「尊敬・同一視」，脱税スキャンダルにおける「流行への反発・独占」など，スキャンダルの特性とファン心理が対応する場合には，異なる認知的不協和解消のパターンが存在する．このような場合には不協和が強く，情報回避や緊張解消といった形で態度を保留し，結論を先送りする傾向が見られる．情報回避と緊張解消のどちらが選択されるかは，スキャンダル特性のネガティブ性による．よりネガティブ性が強く，反社会的なスキャンダルの場合には情報回避が，比較的容認されやすいスキャンダルの場合には緊張解消が選択される傾向が見られる．

今後の課題

スキャンダルの構造解明

本研究では，センセーショナリズムの要素である「犯罪・暴力的要素」，「金銭的要素」，「性的要素」（大井，1993）に基づいて「不倫」，「麻薬」，「暴行」，「脱税」の4場面を設定し，分析結果からこれらの4場面が質的に異なることが示唆された．しかし，本研究のデータはファン心理の観点からの研究であり，スキャンダル研究の立場からは，スキャンダルの構造を解明する必要がある．たとえば，スキャンダルの統制可能性や意図性，相手の有無，損失の大きさや補償可能性，一般性などの視点から，各スキャンダルを体系的に位置づけることが可能であろう．

また，本研究においては，暴行場面の認知的不協和解消パターンは複雑で，重層的な構造であることが示されたが，その理由として，暴行場面の責任帰属や統制可能性があいまいで，多様な解釈が可能であったことが考えられる．

職業別・性別分析

小城（2004）は，「ミュージシャン」や「スポーツ選手」は「作品の評価」や「尊敬・憧れ」が高く，「アイドル」や「俳優」は相対的に「外見的魅力」や「疑似恋愛感情」が高いなど，職業別にファン心理が異なることを明らかにしている．本研究では，スキャンダル場面別の分析に重点を置いており，サンプル数等の問題から対象の職業別の分析を行っていないが，職業によってスキャンダルのダメージが異なることが予想される．たとえば，不倫スキャンダルにおいては，より「疑似恋愛感情」の強い「アイドル」や「俳優」の方が，ファンに与える衝撃が大きい，麻薬や暴行場面においては，より「作品の評価」の強い「ミュージシャン」の方が，本人と作品を切り離すことで不協和を解消しようとするが，「尊敬・憧れ」

の強い「スポーツ選手」は不協和が強く，暫定的に「情報回避」を行うなどである．

また，小城（2006）では，対象とファンの性別の組み合わせによって，ファン心理に差異があることを見出している．たとえば，「疑似恋愛感情」は異性同士の組み合わせ，「尊敬・憧れ」は同性同士の組み合わせの方が高いなどである．本研究で扱った「疑似恋愛感情」や，設定した不倫場面は，対象とファン自身の性別の組み合わせによって，スキャンダルに対する反応が大きく異なると推測される．

ファン心理尺度

本研究では，小城（2004）を参考に独自にファン心理尺度を作成したため，小城（2004）とはやや構造が異なっている．そのため，小城（2004）の知見を直接的に引用することが困難であり，下位尺度の特徴にあいまいな部分があった．今後は，小城（2004）と同じ尺度を用いて，再分析をすることで，より規定関係が明確になるであろう．

注

1) 本研究は，人間関係専攻「社会調査実習 1」の課題として，秋山りつさん，林智子さん，五十嵐唯さん（60 回生）が収集したデータを，筆者が再分析したものである．

2) 平成 20 年度聖心女子大学大学院文学研究科社会文化学専攻博士前期課程修了生

3) かつて，家同士の見合い結婚が常識であった時代には，男女間の恋愛は「恋愛事件」と呼ばれ，規範から逸脱した「スキャンダル」であったが，恋愛結婚が主流となった現代ではスキャンダル性が薄れた．不特定多数のファンの擬似恋人である「アイドル」（稲増，1989）も，より身近で親しみやすい存在に変容しており，恋愛もオープンに語られるようになっている．したがって，有名人の交際だけではスキャンダルとはいえず，不倫や三角関係など，ネガティブな要素が含まれていることが条件となろう．

引用文献

Festinger, L., (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Row, Peterson（末永俊郎監訳（1965）．認知的不協和の理論―社会心理学序説―誠信書房）

Fine, G. A., & Rosnow, R. L., (1978). Gossip, gossipers, gossiping. Personality and Social Psychology Bulletin, 4, 161-168.

広沢俊宗・田中國夫（1986）．阪神タイガースのファン気質に関する研究（1）　日本社会心理学会・日本グループダイナミックス学会合同大会論文集　35-36.

広沢俊宗（1989）．阪神フィーバー現象の分析　ザ・心理学バザール　田中國夫（編）　創元社　*pp.* 230-235.

飯室勝彦（1991）．報道の中の名誉・プライバシー　現代書館

稲増龍夫（1989）．アイドル工学　筑摩書房

石田佐恵子（1998）．有名性という文化装置　勁草書房

石田佐恵子（2001）．ワイドショーと〈芸能人〉情報の商品化　青弓社編集部（編）プライバシーと出版・報道の自由　青弓社　*pp.* 233-252.

Kapferer, J. N. (1989). A mass poisoning rumor in Europe. Public Opinion Quarterly, 53, 467-481.

上瀬由美子（1994）．タカラヅカファン　ファンとブームの社会心理　松井豊（編）サイエンス社　*pp.* 53-70.

上瀬由美子・亀山尚子（1994）．大相撲ブーム　ファンとブームの社会心理　松井豊（編）　サイエンス社　*pp.* 73-90.

川上桜子（2005）．ファン心理の構造―思春期・青年期の発達課題との関連から―東京女子大学心理学紀要，1, 43-55.

川上善郎（1997）．うわさが走る―情報伝播の社会心理―　サイエンス社

小城英子（2004）．ファン心理の構造（1）ファン心理とファン行動の分類　関西大学大学院『人間科学』 61, 191-205.

小城英子（2006）．ファン心理の構造（3）性別によるファン心理・ファン行動の比較と，ファン層の分類　関西大学大学院『人間科学』 64, 177-195.

松井　豊（1993）．恋ごころの科学　サイエンス社

中村紀子（1994）．ユーミン現象　ファンとブームの社会心理　松井豊（編）　サイエンス社　*pp.* 15-34.

中野　収（1987）．「スキャンダル」の記号論　講談社

梨元勝（2001）．噂を学ぶ―学問としてのスキャンダル　角川書店

西川千登世・上笹　恒（2006）．音楽ファンのコンサート参加行動における精神健康度への影響　日本社会心理学会第47回大会発表論文集，786-787.

小川　一（1997）．メディア後輩の系譜，報道される側の人権―メディアと犯罪の被害者・被疑者　飯室勝彦・田島泰彦・渡邊眞次（編）　明石書店　*pp.* 78-95.

大井眞二（1993）．センセーショナリズムを考える－アメリカ・ジャーナリズム史の文脈から－　マス・コミュニケーション研究，43, 45-62.

Ranny, A., (1983). *Channels of power: The impact of television on American politics*. NY: Basic Books.

佐藤友之（1987）．虚構の報道　犯罪報道の実態　三一書房

Schachter, S., (1959). *The Psychology of Affiliation: Experimental studies of the sources of gregariousness*, Stanford University Press.

杉尾　秀哉（1997）．被害者のプライバシーとテレビ報道，報道される側の人権－メディアと犯罪の被害者・被疑者　飯室勝彦・田島泰彦・渡邊眞次（編）　明石書店　*pp*. 96-113.

海野弘（2000）．スキャンダルの時代　集英社

上野行良・渡辺麻子（1994）．小田和正ファンの心理　ファンとブームの社会心理　松井豊（編）　サイエンス社　*pp*. 5-50.

山川洋一郎・山田卓生（1987）．有名人とプライバシー　有斐閣